
噂の保安官助手

阿尾丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

噂の保安官助手

【Nコード】

N2327Z

【作者名】

阿尾丸

【あらすじ】

フロンティア・シティという西部に位置する田舎町には、保安官の助手である二人の女の子が居た。悪党と戦い、馬と心を通わせ、そして・・・大切な人を見つける。

1・西部の町

ジャンは驚きで息をはずませていた。

走りながら、慌てすぎて人に何回かぶつかることもあった。

「おっ、なんだよジャン。そんなに急いで」

そんな彼を引き止めた青年がいた。

青年は家の屋根にかかった梯子に足をかけた状態で振り返った。

「ゼン！また後でな！俺急いでるんだ！」

「あー、お前うかつたんだって？あの噂の保安官の助手だろ？」

「ああ！そう！だからその、また手紙でもするから！」

「お前馬に乗る練習したのか？」

とにかく急いでいたジャンは、彼の言葉に返事もせずまた走り出した。

前を向いたまま、腕だけをゼンに向けて乱暴に振り上げた。またな、の合図だ。

背中には、どうやら長旅になるであろう大きな鞆を背負っていた。

そんなジャンを目で追いながら見送ったゼンは、「はー」と小さなため息をついた。

「噂では、その保安官助手になって2ヶ月続かないって聞いたけど・
・まあ、いいか」

- - - - -

地平線から朝日がもうすぐで顔を出しそうな明け方。

フロンティア・シティを出ると、小さな丘がところどころにあり、その辺りは荒野がどこまでも続いている。

その荒地に一人佇む影があった。

太陽さえ姿は見えないが、その光でもうすでに辺りは十分明るかった。

乾いた大地を蹴る馬の足音に、少女は振り返った。

ウェーブのかかった栗色の髪を背中までたらし、少女は片手にウエスタンハットを持っていた。

荒地で佇んでいた少女・ニコルの前で、急停止した川原毛の馬から乗り手が荒地へと颯爽と降り立った。

「そろそろ時間なんだけど」

「マックス！今日はなんなの？」

「バーキーさんの所の馬がまた野生化したみたい」

「またパトリックなの？」

スマートな足に皮ズボンを履き、腰のベルトにカービン銃を差し込んでいる。

ニコルとは対照的なストレートの漆黒の髪に、深々とウエスタンハットを被っている。

「分かったわ。バターを呼ぶわ」

ニコルはもう一度振り返り指を口に当て、荒野に向かって口笛を吹

いた。

やはり人間技なのだから口笛の音の大きさにも限度があるだろう。

彼女ニコルの吹く口笛もやはりそこまで大きくはない。

だが、馬には聞こえるというのだ。特に、どこにいても彼女の愛馬バターには。

漆黒の髪 of 少女・マックスは河原毛の馬マーガリンの手綱を片手に持ち、彼女もまたニコルと同じ方向を見つめていた。

その時、いくつもの丘が折り重なる陰の場所からいきなり激しい土煙が立ち上った。

「バターだわ！」

そしてもう一度、ニコルは口笛を吹いた。

まだ何も見えてはいないが、その土煙は生きているかのごとくこちらへ向かって近づいてくる。

全力疾走してきたのか矢のような速さだったため、その本体が馬であるということはすぐに分かった。

白い毛と茶色い毛が絵の具のような模様を描く、バターはピントホースだ。

徐々に減速し、ニコルの前まできて何度か尻っ跳ねをして止まった。白い鬣が風でなびき、光にてらされ白銀に輝いていた。

「おはよう、バター。今日もまた乗せてね」

自然と頭を下ろすバターの顔を、額から下へと撫で下ろす。

そしてニコルは、膝下ほどの褐色のウエスタンスカートを乱舞させながら馬の背中に飛び乗った。

鞍も頭絡も無口も何一つとして装備していない裸馬に跨るニコルの姿は、マックスからすれば見慣れた姿であった。

ニコルが馬に跨ったことに習い、マックスも鐙に左足をかけ愛馬の背中へと素早く跨った。

ニコルの愛馬とは異なり、毎日を馬房の中で過ごしているマックスの愛馬は装備万全な姿だ。

マックスが馬の尾っぱまで届きそうな長い手綱を馬の両脇に打ちつけた瞬間、前足で力強く地面を蹴りつけたマーガリンに続き、バタ―もまた一気に飛び出した。

そして二頭は、並んで荒野の中を駆け抜けていった。

- - - - -

ニコルとマックスはフロンティア・シティという西部に位置する田舎町に住んでいる。

当時の記憶がほとんどないほど幼い頃に、親のいなかった二人を拾い育ててくれたのが、フロンティア・シティで保安官をやっているリチャードであった。

フロンティア・シティの人々から慕われているリチャードは優しく時に厳しい。

リチャードとニコルとマックスは血さえ繋がっていないが、一つ屋根の下本物の家族のように仲良く暮らしている。

しかし、リチャードの保安官という仕事上、周りにはなにかと事件が付きまとう。

それは殺人事件から強盗事件など凶悪なものもあれば、今日のように脱走癖のある馬がまたも脱走してしまうことなど。そういった事

もりチャードの所に駆け込み、「捕まえてくれ！」と頼まれる事がこの町では普通だ。

バーキーという男は、リチャードの家の向かい側にある酒場のオーナーである。

酒場の裏に自分の家畜小屋を持ち、馬も何頭か飼っているのだ。この西部の町ではほとんどの者が自馬を持ち、交通手段として馬が使われているほど、馬車ではなく馬に乗ることがあたりまえとされている。

しかし、中年のバーキーは最近下腹の重さで馬に乗るのも困難になつてきたようだ。

昔からの好みもあり、脱走癖のついた馬が脱走するたび、リチャードの元に駆け込んでくる有様だった。

そんなリチャードの多すぎる仕事を支えるのが彼の娘のような存在であるニコルとマックスの役目であった。

その事は陰ながら支えると言ったものではなく、何年も前から始まり、もう今ではフロンティア・シティ公認の出来事であった。

この町で、二人のことを保安官助手のニコルとマックスと言えば、知らない人はいない。

「おお。毎回すまんねえ」

「いいえ。これも私達の仕事ですから」

「ニコル、家のバカ馬に愛想を尽かさんでくれよ」

「馬はみんな私の友達ですから」

ニコルとマックスがバーキーの馬を見つけて捕獲するまでに10分はかからなかった。

綱によって捕獲された馬は逃げ回っていたのが嘘のように大人しく

なり、フロンティア・シティに戻ってバーキーに馬を引き渡したのは、午前8時前であった。

いつものように、社交的ではないマックスが酒場の前で馬の見張りをしに残った。

これでバーキーの馬パトリックが脱走したのも5度目になるのだから、慣れたものだ。

人当たりの良いニコルはパトリックをバーキーに引き渡した。

「いや本当にニコルはいい娘だよ。なあ、息子の嫁に来んか？」

会ったびに「嫁に来んか？」と同じ台詞を繰り返すバーキーに、ニコルは苦笑いを返した。

バーキーにはニコルより五つ年上の息子がいるのだから、しょうがないといえはしょうがないのだが。

現在は一人で放浪のたびに出掛けていて、その消息は不明である。

バーキーを振り切って酒場を出たニコルは、仏頂面に腕を組んで待っているマックスの元へと駆け寄った。

「今日は早く帰らなくちゃ！新しいお手伝いさんが来るらしいからお持て成ししないと」

「なにそれ。私は聞いてない」

「そうだったの？もう二週間ぐらい前から決まってたよ」

馬の手綱を引きながら自分達の家裏にある厩舎に向かって歩きながらニコルが説明すると、その横を歩いていたマックスがいつそう機嫌の悪そうな顔をした。

マックスの後ろにピッタリ着いて歩くマーガリンが、体についたハエやアブを尾っぽではらった音がした。

そこでニコルは後ろを歩くバターを振り返り、額をなでおろした。

「バター。今日はまだお仕事があるかもしれないから、馬房に入っててね」

ブブツ、とバターが鼻を鳴らす。

隣を歩くマックスがまた呆れた顔をする。

マックスにとって、この二頭の馬の名前は未だ気に入らないものであるからだ。

幼い頃にニコルが無理やり命名したからなのか、マックスはあまり自分の愛馬の名前を呼びたがらない。

家の裏にある厩舎の中には、馬房がいくつかあり、リチャードが昔から育てている馬達が大切にされている。その中にはバターとマーガリンの馬房もある。

マックスはマーガリンの鞍を外さず鉄の棒に引き綱で繋いで厩舎を出た。

その後を、ニコルは追って家に入った。

家に着いたのは8時を回ったところで、リチャードが丁度朝食の準備を終えたところだった。

「今日新入りが来るって本当？」

「やあ、マックスおはよう」

ウエスタンブーツで木の床を傷つけるかのような乱暴に歩くマックスの、朝の第一声はこれだった。

リチャードはマックスのこのような態度に慣れているためか、コーヒーの入ったカップを優雅にすすっていた。

マックスは無表情だったが、内心イライラしているのはすぐに分か

った。

その後を追って来たニコルが、すぐに間に入ってきた。

「お父さん言っでなかったの？マックスだけ聞いてなかったみたいで」

血の繋がりはないが、ニコルはリチャードを「お父さん」と呼んでいる。

「そうだったのか。そんな怖い顔をしてどうしたかと思えば、なんだそんなことか」

「どんな男？」

「それはお前の勘か？いや確かに彼は男性だが。どうして分かった？」

「いつも男だから」

「おお、そうだったかな」

おどけてみせるリチャードは、どこかニコルと似ている。

リチャードの自慢の真っ白なウエスタンハットには、保安官のマークが小さく光っていた。

がたいのいい体系に清潔感溢れる着こなしは、この田舎町にしては紳士的な印象を与える。

そう思わせておいて、彼は実は今年で六十歳になる。

現在十八歳のニコルとマックスは、孫にでもあたる年齢なのだ。

「昼頃に到着する。それまでどんな男か想像を膨らませておけ。ただ言っておくが、初対面から文句をつけるのは今回はやめてくれよ。これまで何人がやめていったことか」

早口で忠告するリチャードに、マックスは口をつぐんだ。

保安官とはなかなか大変な仕事であり、本来ならば副保安官なるものがいるのだが、このフロンティア・シティにはリチャード一人である。ニコルとマックスが一応は助手ということにはなっているのだが。

そこでいつも一人だけが求人しているのだ。

なぜいつも求人しているかは、マックスが辛く冷たく厳しくあたるせいで、毎回一ヶ月ほどで仕事を覚えたかと思うと辞めていつてしまうからだ。マックスが気に入る人がなかないというのが現実だが、リチャードとニコルにとっては特に問題とも思えない人ばかりだった。どちらかと言えば、満点をあげても良いほどの人もいた。

「私達では不満なの？」

「そうは言っていないだろ。ただ、私ももうこの歳だ。先の事も考えているんだよ」

どうやらマックスには、自分とニコルだけでは不満だから求人をしているのだと思わずにはいらなかったようだ。

しかしリチャードの言葉に、マックスは反論できなかった。

「ギルバートは顔も性格も男前だったんだぞ」

「あの男は女癖が悪すぎる」

ギルバートとは、リチャードとニコルが満点をあげてもいいと思った助手のこと。

しかしマックスの酷い嫌がらせにあい、最短で仕事を覚えた彼もまたこの仕事を最短で辞めていった。

確かにギルバートはなかなかの美男子だった。そのため町中の若い

女が彼に集っていたことは確かだが、ギルバートにその気があったかどうかは定かではない。

今日ここに来る予定の助手もまたマックスに嫌がらせを受けないだろうかと、リチャードとニコルはそのことが心配でならなかった。

2・新しい保安官助手

事件発生は一本の電話によって知らされた。

ニコルとマックスが朝食を食べ終えて9時を回った頃だった。

電話の相手は、フロンティア・シティの鍛冶屋であるローレンの妻・ハンナからであった。

仕事に使う器具を買いに港町・グレンアークに行った帰りに、道すがら溝にはまってしまった馬車を見つけたというのだ。

どうにこうにも馬車は動かず、助けを呼んでくると言って帰ってきたらしい。

この田舎町に向かってくる馬車など珍しいものだ。何か大きな荷物でも運んでくるのだろうか。

そう思いきや、ハンナは馬車の中に乗っていたのは男一人だと言う。どうやらフロンティア・シティに昼頃までに着かないといけないうらしく、大分焦っていたようだ。

「それってもしかして、お手伝いさんのことかな？」

「でもなんで馬車」

「お金持ちなのかな？」

「そんなヤツがこの田舎町に？」

マックスはまだ見ぬ相手を想像して鼻で笑った。

今までここに助手として来た皆が、自馬を持ち乗馬が堪能であった。さらには来る途中で何かあるなんて、今までにはなかった事例である。

「とにかく外は暑いから、早く迎えに行つてあげなさい」

仏頂面をしているマックスの横を通り過ぎたニコルが相槌を打った。そして、マックスをなだめるようにその肩を掴んでニコルは戸口へと歩き出した。

「馬をもう一頭連れて行くことも忘れるな。水と軽食も持っていて馬車にはそこから引き返してもらいなさい。この辺りは馬車で通るような地形でない。またはまっとう前に帰してあげたほうがいい」

「分かったわ」

ニコルはリチャードの言う通りに、水と軽食ともう一頭馬を準備して家を出た。

水と軽食や馬車を引き上げるための丈夫な縄や鎖などは、もう一頭の馬の背にすべてくり付けた。そんなニコルの一部始終を、馬に跨ったマックスは何も言わず見ていただけだった。

二人がフロンティア・シティを出て港町・グレンアークへ向かう道筋に着いたのはおよそ15分後だった。そこからおよそ10分の所で、いとも簡単に溝にはまって動けないでいる馬車を見つけることが出来た。

溝というか、ちょっとした地形の窪みというべきだろうか。

後方の車輪が上手い具合にはまってしまっていた。

その少人数しか乗れなそうな小さい馬車を引いているのは、骨ばって痩せこけた馬だった。

「なんでこんな馬に・・・」と小さく呟いたマックスは、痩せこけている馬をバカにしているわけではなく、痩せこけている馬を使っている人間の効率の悪さをバカにしているのだ。

乾燥地帯、炎天下の下で人も馬もすでにバテてしまっているようだった。

遠目からは何度か馬車の後ろを押す人の姿が二つ見えたものの、馬が全く引つ張るつもりがなさそうで、数ミリも動いていなかった。逆に後退しているぐらいだ。

すぐさま馬を下りたニコルは、馬車の後ろで座り込んでしまっていた二人に駆け寄った。

「遅くなりましたが、お助けに上がりました。フロンティア・シテイの保安官助手のニコルです」

素早く顔を上げたのは青年の方だった。被ったウエスタンハットから赤毛に近い髪が覗いていた。

「マジで！助かった！」

青年は汗で少しすすけた頬を綻ばせて、砂漠で見つけたオアシスを見つめるかのような目でニコルを見た。

すぐさま立ち上がった青年は、力強い手でニコルを両肩をわしづかみした。

一瞬驚いたニコルだったが、相手が心からの喜びを表しているのだとすぐさま理解した。

「大丈夫ですか？彼方が・・・ジャンさん？」

青年は声が噎れてしまうほど疲れているのか、大きく相槌をうった。しかし、次の瞬間には青年の両手はニコルの肩から離れていた。驚いた青年の噎れてしまった声の代わりとして、その口が半分開い

た状態で止まった。

「ニコルから離れて」

いつのまにか背後に回っていたのか。

青年の真後ろでカービン銃を突きつけたマックスの目は殺気立っていた。

マックスのことを盗賊だとも思ったのか、青年は両手を頭の上まで上げていた。

「違うのマックス！銃を下ろして。この人がジャンさんよ」

この荒野に吹く乾燥した風がしばらくマックスの長い髪を揺らす間、マックスは黙って青年を見つめていた。

やがて、ゆっくりと銃口を地面へと向けていく。

「ジャン？」

「今日来てくれる予定だったお手伝いさんよ」

「ああ」と小さく相槌を打ったマックスは、銃口を地面に向け手を腰の脇でぶらぶらさせた。

マックスは何のために溝にはまってしまった馬車を助けに来たのか、もう忘れてしまったようだ。

ちなみにニコル達が「助手」のことを「お手伝い」と呼ぶのは、せめてものマックスの気休めのためだった。

表情からすれば、興味など全く無いといった様子のマックス。

ニコルがほっとしたのもつかの間。

両手を頭上に上げっぱなしだった青年に動きがあった。

「はっ・・・ありえねええー、なんだこの女は。マジでホントに殺されるかと思った・・・」

一瞬何が起こったのか分からなかったが、銃声が鼓膜を打ち破るかと思われた。

それぐらい近くで、弾丸が頭上を通り抜けていったのだ。

馬車の御者をしていた焦げた肌の痩せこけた男が小さな声で「ひい」と叫んだ。

そして、青年の被っていたウエスタンハットが音と共に荒野へと飛ばされていった。

瞬間的にマックスが青年のハットのふちを狙い撃ちしたのだ。

徐々に顔の色が青くなっていく青年を、ニコルはともいたたまれなく思った。

「マックスは早撃ちの名人なの。だから気をつけてね」

そう言ったニコルの腰にも銃が二つ所持されていて、青年はさらに顔色を悪くした。

- - - - -

「またマックスが殺ってしまったかと思ったよ」

はまってしまった馬車を自分達の馬の力も加えて引き上げ、食料を渡し御者には帰ってもらった。

それから三人で家に戻った時、リチャードの出迎えの言葉はこれだった。

少々時間がかかったという意味なのか、はたまたマックスの銃声を聞いたということなのか。

すでにぐったりと疲れ果てていた青年・ジャンが、その言葉に顔色を悪くすることはなかった。

「弾が無駄になった」

「無駄になったのは俺の帽子だろ！」

言い返したジャンを無視して、マックスは大股な足取りで家の中へと消えていった。

「すまないね。改めて帽子はこちらで用意させてもらうよ」

「いえ・・・俺の方こそすみません」

「マックスは他人にはなかなか心を許さなくてね」

疲れ果てていたジャンは返事をする事も出来ず、正面玄関前にある階段に座り込んでしまっていた。

それは馬車を引き上げようと馬車の背を押したからでも、暑さで体力を消耗したからでもなかった。

「しかし馬に乗れない助手は初めてだな」

はまった馬車を引き上げ、すぐさま馬車には港町へと引き返してもらった。

そのためジャンには余分に連れて行った馬に乗ってもらったのだが、なんとジャンには乗馬技術が全くなかったのだ。

ニコルが綱を自分の馬にくくり付け、その綱でジャンを乗せた馬を

引つ張ったためジャンは無事にここに来ることが出来たのだが。
しかし馬に乗れないジャンにしてみれば、乗っているだけで精一杯な状況だったのだが。

後ろも気にせず、初心者にも厳しく、マックスが思いきり馬を駆り立てたのだった。

「情けない」

いつの間にか姿を現していたマックスが、独り言のようにだが大きな声で呟いた。

「もうマックス！」

ジャンを気遣ったのか、ニコルがマックスに注意を促したが、マックスはそ知らぬ顔だ。

そのまま大股で厩舎の中に入っていつてしまった。

「ごめんなさいね。気にしないでいいから」

座り込んだままのジャンの側に駆け寄り、笑顔を見せたニコル。
ジャンもまたその笑顔に、疲れを含ませた笑顔を「ハハハ」と返した。

「ニコル。とりあえず中に案内してあげなさい」

「あ、はい。じゃあ、ジャンさん一応家の中にどうぞ」

「はい・・・」

テキパキと明るく、ジャンを案内すべく家の戸口まで歩いていったニコル。

その後姿を振り返りながら、ジャンはやっと立ち上がることができ

た。

そこでジャンは、誰にも聞こえないくらいの小さな声で呟いた。

「あの女、ありえねー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2327z/>

噂の保安官助手

2011年12月8日12時46分発行